

## ハイデルベルク信仰問答より

問 103 第四戒で、神は何を要求されていますか。

答え 第一に、福音の説教とキリスト教教育が維持され、私が喜んで教会に出席し、とりわけ主の日には出席し、神の御言葉を聞き、聖礼典にあずかり、公に主を呼び求め、必要とする者にキリスト者としての奉仕を行なうことであります。第二に、私は生命の限り悪い行ないをやめ、聖霊によって主が私のうちに働いてくださるようにし、こうして永遠の安息をこの世に生きている間に始めることであります。

第四戒 安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である。主は六日のうちに、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造り、七日目に休息された。それゆえ、主は安息日を祝福して、これを聖別されたのである。(出 20:8-11)

今日は「第四のことば」すなわち「安息日を覚えて、これを聖別しなさい」の内容を学んでまいります。この「戒め」は、信仰に生きようとするすべての人の生活のあり方を問うものです。旧約イスラエルの流れにあるユダヤ教徒にとっては土曜日が、新約のキリスト教会にとっては日曜日が「安息日」に当たります。ユダヤ教徒にとっては週の七日目、キリスト教徒にとっては週の一日目ですが、いずれも天地創造の六日の後に神が休息をとられたという記事に基づいており(創世 2:2-3)、この創造主を信じる者は同じように「安息日」を守ることが求められています。キリスト教会では、主イエスが復活された日が日曜日であったこと(例: マタイ 28:1)、その後弟子たちに現れた日々も日曜日であったこと(例: ヨハネ 20:19, 26)を根拠として、日曜日を安息日に決めました。とはいえ、セブンスデーアドベンチストのように土曜日を安息日としているグループもないわけではありません。

十戒の内容によると、安息日には「どのような仕事もしてはならない」と言われています。このことばがどこまで私たちの生活に適用されるか、消極的な言い方をすると「どこまで拘束力を持っているか」が問題となります。実際、旧約聖書を読みますと、安息日規定を破った者が処刑されたという恐ろしい記事もあり(民数 15:32-36)、その後のユダヤ人の歴史においては安息日には敵の攻撃にすら抵抗しなかったという記録もあります。

その頃、義と裁きを求める多くの者が、妻子や家畜を伴って、荒れ野に下り、そこに住んだ。彼らの上に災いが重くのしかかったからである。王の命令を拒否した者たちが荒れ野の隠れ場の下って行ったとの知らせは、ダビデの町エルサレムにいる王の役人たちと軍隊にもたらされた。多数の兵士が急いで彼らの後を追い、これに追いつくと、彼らに向かって陣を敷き、安息日に戦う準備を整えて、言った。「抵抗は

これまでにして、出て来て王の命令に従え。そうすれば、お前たちは生き延びる。」するとユダヤ人たちは言った。「我々は出て行かない。安息日を汚せという王の言葉を実行しない。」そこで兵士たちは彼らに対して、直ちに戦いを開始した。しかし、彼らはこれに応戦せず、投石はおろか、隠れ場を守ることもせず、こう言った。「我々は全員潔く死のう。お前たちが我々を不当に殺したことを天地が証言してくれよう。」こうして安息日に兵士たちは彼らに対して戦いを始めた。イスラエル人は妻子、家畜もろとも殺され、犠牲者の数は一千人に及んだ。(I マカバイ 2:29-38)

キリスト教の歴史における有名なエピソードとしては、ノンフィクション映画「炎のランナー」にも登場するスコットランドの英雄エリック・リデルが1924年のパリオリンピックで陸上競技の短距離走において英国代表に選出された際、日曜日に行なわれる予定の100mへの出場を拒否したという話があります。このときリデルは優勝候補として国の期待を一身に背負っていたため、「狂信者」とも報じられました。しかし彼は、400mで金メダル、200mで銅メダルを獲得し、その記録は最近まで破られていませんでした。

このような先達たちの足跡は、現代に生きる信仰者にも力強いメッセージを与えてきます。それと同時に、「安息日を守る」ということの本質を改めて考えさせられるものです。

主イエスご自身が安息日をどのように過ごしておられたかも、理解の鍵となるでしょう。主イエスは自身を「安息日の主」と呼び(マルコ 2:28)、安息日に敢えて病人の癒しを行なわれました(ルカ 13:10-17、14:1-6等)。そしてその度に旧約律法を厳格に守ろうとするユダヤ教指導者たちから激しい敵意を向けられました。主イエスの論理は一貫して「安息日に神の御心を行なうことは正しい」ということであり、癒しの業は「労働」ではなく「愛の業」であって「愛なる神」の御心に適うことだと強調しておられました。

「聖別する」とは何を意味するのでしょうか。原語を調べると「קָדַשׁ/カダシュ」という言葉が使われていますが、その基本的な意味は「清める」「神にささげる」「神聖化する」「奉納する」「聖別する」「取り分ける」などです。安息日として定められた一日を「神のもの」として取り分けるという意味になります。働くべき期間は「週の六日間」であって、信者は神が七日目に休まれたように仕事の手を止めるべきだと言われています。

「安息日には～をしてはならない」と言われると、その教えを受ける側は自由を奪われる感覚を覚えるかもしれません。礼拝に出席する時間が惜しいと感じる人もいるかもしれません。しかし、本問答書の間104の答えを見ると、安息日を守るということがはるかに積極的なこととして捉えられていることが分かります。

第一に、福音の説教とキリスト教教育が維持され、私が喜んで教会に出席し、とりわけ主の日には出席し、神の御言葉を聞き、聖礼典にあずかり、公に主を呼び求め、必要とする者にキリスト者としての奉仕を行なうことであります。

まず「福音の説教とキリスト教教育が維持され」と言われています。福音のことばは教会で守られるべきものであり、安息日にこそ罪の赦しの福音が語られなくてはならないということです。そして、信仰の土台をつくる教理的な学びが施されるべきであるとも言われています。

「私が喜んで教会に出席し、とりわけ主の日には出席し、神の御言葉を聞き、聖礼典にあずかり、公に主を呼び求め」と多くの要素が出てきますが、特に注目すべきは、教会に出席することが喜びであると言われている点でしょう。神の民の一人としてその群に戻ってくる感覚、そこで神の語りかけを聞き、主イエスとの契約のしるしとしての聖餐式にあずかる。更に、司式者のことばに心を合わせながら、会衆が一つとなって主に祈る時でもあります。そのような時間を最高に幸せな時として捉えているのです。礼拝を「喜びの時」と捉えられるようになるためには、救われた人と神の関係を理解し、永遠の安息がそこにあることを認識しなくてはなりません。ただ「奉仕に追い立てられる日」であってはならないのです。「必要とする者にキリスト者としての奉仕を行なうこと」とありますが、安息日にこそ主イエスと同じように愛の業に勤しむべきことが加えられています。御言葉によって養われた魂は、隣人への愛となって溢れ出るのです。

**第二に、私は生命の限り悪い行ないをやめ、聖霊によって主が私のうちに働いてくださるようにし、こうして永遠の安息をこの世に生きている間に始めることであります。**

安息日を守り礼拝に参加することは、信仰生活のベースをしっかりと形作ることへとつながります。「悪い行ないをやめ」ということばにはドキッとさせられないでしょうか。これは、礼拝から日常生活に戻ったときに、礼拝とは無関係の生活になってしまうのではなく、常に神が自分の歩みに伴ってくださっているという意識をもって、聖霊を悲しませることのない生き方を志していくということです。「聖霊によって主が私のうちに働いてくださるようにし」と言われていますが、私たちが罪を犯すとき聖霊は力強い御業を私たちを通して行ないにくくなってしまいます。「通り良き管」として、私たちを通して主が働いてくださることを求めつつ、週の六日間を歩みたいと思います。「こうして永遠の安息をこの世に生きている間に始める」とあるように、安息日を基礎として一週間のすべての日々を「永遠の安息」として生きていくこと、これこそが安息日の真の意味なのです。

音楽科に在籍していた頃、声楽の先生がこのような質問をされたのを覚えています。「あなたは仕事のために休みますか、それとも休みのために働きますか」。答えは一つではないかもしれませんが、今日の学びを通して与えられる示唆は、私たちは「永遠の安息」のために働いているのではないかということです。日曜日という安息日に向けて週の六日を歩んでいるとも言えるでしょう。しかし、より本質的には、私たちのすべての生活の営みは「永遠の安息」のためにあり、「永遠の安息」の中ですべての時間を神と共に歩んでいると言えます。